発掘ニュース42

伏見城の金箔瓦

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真1　伏見区桃山筑前台町から出土した金箔瓦

冬の早朝、大阪城公園をジョギングしていると、天守閣の軒先を飾って一列に並び、金色にキラキラ輝く瓦に目を見はってしまいます。これが秀吉好みの黄金に輝く金箔瓦です。

金箔瓦は、織田信長の頃から使用され始め、豊臣秀吉の時に最盛期を迎えます。そして、江戸時代にはあまり使われなくなった、桃山時代を象徴する瓦です。

桃山時代、秀吉は黄金に輝く城を、この京都の地にも築城しています。その一つが伏見城です。

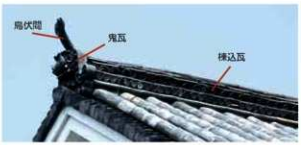
伏見城はわずか30数年しか存続しませんでした。文禄元年（1592）指月（しづく）の森あたりに普請（ふしん）を開始しますが、4年後、大地震のためにほぼ全壊してしまいました。しかし、地震の翌日から木幡（こはた）山に場所を移して再建を開始し、より大規模で華麗な城が完成しました。

慶長三年（1598）秀吉の死後、翌年から徳川方が入城していましたが、慶長五年の関ヶ原の役の時に西軍に攻められ陥落、炎上してしまいます。その後、徳川家康により再建されますが、元和九年

調査地付近のようす

（1623）には取り壊されます。

1999年3月、JR桃山駅の北側で住宅建築現場の立会調査を行ないました。50cmほど表土を掘り下げると、赤褐色の土に混じって瓦がぱらぱらと現れ始めました。さらに東側と南側の斜面では、瓦が



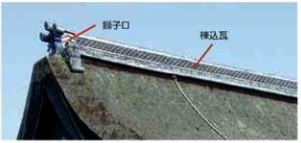


写真２　瓦の使い方

ぎっしり詰まった層が現れました。工事現場のホコリを含んだ風の中、出土した暗灰色の瓦を見ると、キラキラ光っているものが見つかりました。これが伏見城の屋根を飾っていた金箔瓦の、400年後の姿だったのです。

さらに、地表から約３m下からも、瓦だけが詰まった長さ15m・幅５m・深さ１mほどの大きな穴を見つけました。その北側では、地表から約２m下で、南北方向の石垣の一部と考えられる遺構を発見し、この付近からも多量の瓦が出土しました。

瓦の土を洗い落としてみると、金箔瓦が100点近くあることがわかりました。その中で大型の飾り瓦の種類と量が多かったことが注目されました（写真１）。

さて、出土した金箔瓦は屋根のどの部分に使用されたのでしょうか。瓦の大半は、大阪城で見たような軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦です。ほかに大棟（おおむね）の側面を飾る棟込（むねこ）瓦、棟の端を飾る鬼瓦・鳥伏間（とりふせま）・獅子口（しし）などの飾り瓦と呼ばれる桐や菊花などの家紋を大きくかたどった瓦などがあります（写真２）。いずれの瓦も装飾部分に金箔が多量に使用されていました。

洗い終わった金箔瓦を乾かしていると、金箔がめくれているものがありました。金箔の裏には褐色や赤い色のものが付いています。これは、金箔を瓦に接着するために塗られている漆です。このほかに、朱色の漆を金箔以外の文様に塗った瓦も見つかりました（写真１－１）。

金箔瓦の製作技術の一端を見ることのできる瓦は、ほかにも見つかっています。いろいろな大きさの方形に切った金箔を、そのまま文様に貼り付けた瓦です。唐草の巻込みの部分に１cm方形の金箔を貼っているものもありました（写真１－２）。

今回の調査地東側でも、多量の金箔瓦や石垣が発見されており、この近辺に大名屋敷か城郭にかかわる重要な施設があったと考えられます。

壮麗に輝いている城を見た人々の驚きは、いかばかりであったでしょう。当時の驚きを想像させるものとして、『聚楽第図（じゅらくだい）』という屏風（びょうぶ）絵があります。聚楽第も豊臣秀吉が京都の地に築城した金箔瓦で飾られた城でした。この絵では金箔瓦が大きく描かれており、よほど印象に残る装飾であったことを物語っています。

このように、出土した金箔瓦からも桃山時代の製作技術がわかることがあり、400年のへだたりが少し近づいた気がします。

やがて風が止み、日差しに照らされて金箔瓦が輝きを増した時、季節は夏を迎えていました。

（吉本　健吾）

『聚楽第図屏風』部分　（財）三井文庫蔵